

氏名	オオ タケ ヒロ コ 大 竹 寛 子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博 美 第 321 号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉mind stream、floating instant 〈論文〉連続的瞬間の中にある恒常性

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(美術学部)	齋 藤 典 彦
(論文第1副査)	〃	教 授	(〃)	佐 藤 道 信
(作品第1副査)	〃	准教授	(〃)	植 田 一 穂
(副査)	〃	教 授	(〃)	関 出

(論文内容の要旨)

芸術作品が存在する一つの意義として私が考えているのは、自分の個人的な体験の特性や自分が向き合う知覚対象世界の特性を表現し、作品を通して鑑賞者に各々の経験を含めた新しいものとして感覚的に追体験してもらうことである。

とくに私は、絵画、すなわち日本画という手段によって、共通の認識としての普遍的・恒常的な何か、また逆に1秒後さえ分からない不確かさを観る側に予感させることができるのではと考え制作している。

ふと見る風景、植物や動物に重ねる感情は人により様々であるが、私がモチーフとして扱う蝶や風景に重ねるイメージは、止まる事のない時間の流れであり、絶えず流れ新しい情報に更新されていく中にある変わらないものの存在である。

本稿のテーマである“連続する瞬間の中にある恒常性”とは、私達の人体そのものの機能の一部を意味するとともに、無意識のうちにその果てしない流れを模倣しようとしていた私の制作のテーマでもある。瞬間と恒常性という一見矛盾した言葉ではあるが、流動的であるからこそ、その中に恒常性を見つけようとする本能的行為、永遠という感覚が存在するならば、それは同時に瞬間を感じる時であると考えている。また作品を制作する私と鑑賞者の間には各々の価値観や経験によって生じる個性の違いはあるものの、人体の構造上、細胞や脳のシステムは同じである。そこから絵画という視覚伝達機能を通して共通感覚としての恒常性をも探っていけるのではないかと考えている。

本稿では、視覚脳の働きや生物学、日本古来の心理から着想を得て、不可逆的な時間の中だからこそ、不変的なものを見つけようとする本質的な行動があること、また作品を通してそれをどう表現していけるのかということについて論じた。

第一章では、視覚脳、生物科学の視点から、変化のなかにみられる恒常性について考察した。絵画が視覚芸術であるということや、制作する過程でモチーフの構造の探究が必須であることから、視覚脳の構造やシステムに興味を持った。そしてあくまでも興味のレベルではあるが、脳の機能や人の細胞について研究する過程で、今まで何気なく制作していた過程と人体が行っている機能の多くが共通していると感じるようになり、更に興味を抱くようになった。

私達の脳は脳に届く、絶えず変化し続ける情報の中から最も基本的なものを捉え、連続的な視覚像から物体および状況の本質的特徴を取り出している。また、生物学の観点から見ても、人体は、原子レベルから常に流動的である。変化し続けているからこそ守られているものがある。変化し続けるという

ことが、恒常性そのものの働きであると感じている。

第二章では、このような生命の本質的行動を前提に、西洋画と日本画にみられる宗教的背景の違いと共通点について論考した。永遠なるものや完璧な法則を追求し、そこに美を感じ取る西洋人の姿勢に対し、日本人は、人生の無常という悲哀感に身をまかせ、儂さの中に美を感じてきたといわれる。しかしその思想には、西洋と日本の美意識の違いと永遠観の違いのみならず共通性を見る事ができ、私はそこに一つのアウフヘーベンがあると考えた。

また絵画に遠近法を導入して以来、見る側は、作者の想定した特定の場所から同じ視点で絵画を見る事を強要された。遠近感や明暗があることにより、一つの瞬間、つまりある人がある地点にいることを反映させてしまうのである。そのことは、言い換えれば、鑑賞者の脳の中で、各々の経験と融合させて作品を完成させる余裕を与えないことに繋がる。逆に平坦な表面、箔による空間表現や光と影を欠いた明確な立体感を持たせない表現は、より脳に想像力を与える神経科学的なトリックであるともいえるのではないか。このような考えを基に日本画の技法を生かした自身の制作の意義について述べた。

第三章では、自身のモチーフ蝶について、蝶に込める様々な象徴的な意味や、そこから生まれる恒常性について考察した。蝶は誰の身の回りにも存在し、良いイメージとしても、悪いイメージとしても使われる。蝶を象徴として自身の作品に登場させることで、鑑賞者の意識にあるパターン化されたイメージを喚起しようと試みた。ある鑑賞者は、蝶を死霊の化身として、またある人は美しく揺らぎあるものの象徴として、また魂の成長として想像するだろう。鑑賞者それぞれの経験を通したイメージを呼び起こしたいと考えた。

第四章では、これまでに制作した作品と博士展の提出作品について解説を行った。作品を通して、自身の経験や記憶を、観る側に個々の経験を含めた新しいものとして感覚的に迫体験してもらうこと、そして、日本画という手段で、不確かさを観る側に予感させ、その中にこそある共通の認識としての恒常的な何かを自分自身も発見していくことが、本研究の実践と目的であり、今後の課題である。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、蝶をモチーフにした日本画を制作する筆者が、蝶と日本画による不確かさと連続性の表現の中に、恒常性を求めようとする試みについて述べたものである。論文のタイトルは「連続的時間のなかにある恒常性」。ここでのポイントは、不変の「恒久性」ではなく、ゆらぎながらも一定の状態を保つ「恒常性」を希求している点である。

筆者はその「恒常性」のモデルを、まず人体の生命維持システムと脳の視覚認識に見出している。人体はDNAによる細胞の複製をくり返すことで、生命を維持している。恒久的な細胞は一つとしてなく、個々の細胞の複製という瞬間を連続することで、生命という恒常性を維持しているのである。また視覚認識は、膨大な情報から脳が必要な情報を選択し、記憶と照合しながら一定の現実認識を行なう。そのシステムが、一瞬として同じ状態のない周囲の風景から、筆者が表現したいものを抽出し、自らの記憶や経験と照合しながら表現へといたる制作のプロセスに、共通していると筆者は考える。それゆえ逆に、制作と表現が、鑑賞者に普遍的で恒常的な何かを共振的によびおこす可能性を、筆者は感じているのである。

また筆者は、日本画という存在にも、同じシステムとしての可能性を見出している。そもそも日本画は、中国文化や西洋文化を受け入れながら展開してきた。それを、異なるもの同士から新たな命題が導き出される“アウフヘーベン”として捉え、そうした変化をくり返しつつなお「日本画」としてあるそのあり方に、筆者は「恒常性」を見る。そこからさらに、20年ごとに建て直すことで存在が維持される伊勢神宮の式年遷宮や、変化と循環の中に普遍や永遠を見る、日本の宗教観や自然観にも同じ発想が見られることを、西洋の宗教や絵画と比較しながら指摘している。「無常」や「ヴァニタス」「メメントモ

リ」など、死生観や哲学にも正面から向きあう筆者の問題意識には、僧侶だったという祖父の寺で遊んだ少時の体験も、深く影響しているように見える。

筆者が主要モチーフとする蝶は、一見そうした問題意識とはやや違う存在にも思える。しかし実際には、蝶は様々な文化圏で、魂や復活、霊の化身、美しく揺らぐ存在など、多様な象徴としての意味をもつという。その多義的な象徴性と、羽ばたきごとに進路が変わる瞬間の連続のような飛び方、しかしそれで蝶であることに、筆者は恒常性を感じとっている。とくに、「ブラジルでの蝶の羽ばたきが、テキサスでトルネードを引き起こす」という、カオス理論の“バタフライ効果”に、筆者は強い共感を示している。小さなでき事が、予想もしない大きな未来につながる必然性と無限の可能性。その理論を数学的に図形化した「ローレンツのストレンジアトラクター」（ローレンツ・バタフライ）は、筆者が作品でも使っているように、確かに蝶のようにも無限記号∞のようにも見える。

「恒常性」や普遍、無常、無限といった問題にとりくんだ本論文は、大問題ゆえに論及は多岐におよぶが、拡散しない構成力は、筆者の意識のリアリティーの強さによるものであろう。骨太でスケールの大きい論文として、高く評価することができる。

（作品審査結果の要旨）

花の美しさは、生命の流れのなかで、死という限界があるからこそ目の前にある一瞬が輝いて見える。そして、変化を繰り返すこと、それ自体が恒常性であり、瞬間の中にこそ永遠が存在する、と申請者は主張する。「連続的瞬間のなかにある恒常性」は修士課程の頃より申請者の一貫したテーマである。申請者は、止まる事のない時間の流れや、絶えず新しい情報に更新されていく中にある変わらないもののイメージを、蝶や植物や風景に重ね様々な作品を制作してきた。

「floating instant」は、時間の流れを表現するという意図のもとに、それを視覚的にどう具現化するかを模索した作品である。時間の経過を、画面上に絵具を流すことで表現し、色彩豊かで力強い作品に仕上がっている。洗練された独自の表現と言える。

「mind stream」は、蝶を用いて画面上に“∞”の形を形成することで、蝶の象徴のひとつである魂とその流れの永遠性を表現した作品である。蝶というモチーフの物質的な存在ではなく、象徴としての蝶、さらには鑑賞者の経験を喚起できるような恒常性を持った蝶を描きたいと望む申請者の意図がよくあらわれた作品となった。

いずれの作品も、高い技術と思索に裏打ちされており、高いレベルで作品を成立させた事を高く評価するとともに、今後の新たなる展開に期待したい。

審査委員会においては審査委員全員が申請者の一連の作品を高く評価し、学位に相応しい作品であると判断し合格とした。

（総合審査結果の要旨）

申請者の作品には、「mind stream」のような蝶をモチーフにしたもの、「floating instant」に代表されるような植物を中心としたものという二つの大きな流れがある。そして後者には植物を中心モチーフとしてはいるが、静物画、特にヴァニタス画と呼ばれる、花や骸骨をとおして死を象徴的に描いたものが多く見られるのが大きな特徴であろう。そこで描かれた植物はヴァニタス画のセオリーどおりに、作者の観念や思いの象徴として画面に存在する。この形式は、修士課程の頃からはっきりした形を取り出し、修了制作を経て今回の「floating instant」で一つ大きく結実した感がある。それは、これまで画

面上ではっきりと描かれていた植物などが絵具の垂れ流しなどにより、単なる記号的描写からずれ始めたことに起因しているように思われる。同様に蝶をモチーフとした多くの作品においても蝶たちは空間を舞いながらも停止し、いわば作者の観念の記号ー死霊の化身、美しく揺らぎあるものの象徴、魂の成長ー「ヴァニタス画」として成立していた。今回の作品ではそれらが崩れ始め、より高い次元であらたな画面世界を形作り始めている。

論文においては、「連続的時間のなかにある恒常性」と題し、不変の「恒久性」ではなく、揺らぎながらも一定の状態を保つ「恒常性」を自身の制作の根拠と位置付けし、論じている。それは、人体の生命維持システムと脳の視覚認識、伊勢神宮の式年遷宮に代表される日本の宗教観や自然観と西洋の宗教や絵画との比較、蝶の多義的な象徴性とカオス理論の“バタフライ効果”など多角的な視点から論じられるが、それらを単に比較するのではなく、異なるもの同士から新たな命題が導き出される“アウフヘーベン”として捉え、作品がその結果であろうとする。そして、変化を繰り返すことこそが「恒常性」であり、中国文化や西洋文化を取り込みつつ変化を繰り返す「日本画」にも筆者は「恒常性」を見る。このように、自身の中で変化し向上していける可能性は無限であり、人間に与えられた死や無常という命題に自分なりの解答を導き出そうとする過程にこそ「恒常性」の真義に繋がるとする本論文は、地味ではあるが真正面からこの世界に向き合おうとする骨太なものである。

以上のように審査委員会において審査委員全員が、申請者の論文、作品ともに博士の学位に値すると高く評価し、合格とした。